

〔論文〕

教職科目「社会科指導法」の改善

— ウェルビーイングを志向する地域学習の単元デザインから —

武 部 浩 和
Hirokazu Takebe

大阪総合保育大学
児童保育学部

本稿は、教育振興基本計画（令和5年6月閣議決定）にある計画コンセプトの「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」が、小学校社会科の省察と改善の好機であると捉え、執筆したものである。

まず、小学校社会科の授業改善に必要なウェルビーイング言説を整理する。次に2024年度から使用される小学校社会科の教科書を分析する。そして、実践上の課題を明らかにし、ウェルビーイングを志向する単元デザインの要点を提案する。

キーワード：教師教育、ウェルビーイング、エージェンシー、エンパワメント、単元デザイン

I 問題の所在

本稿の目的は、教員志願学生や現職教職員（以下、教職員等と略称）がウェルビーイング志向の教育改革を理解し、自らの小学校社会科の授業改善につなぐことができるように寄与することである。

教育現場にウェルビーイングという概念が浸透し始めたのは、文部科学省（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指しての公表のころである。この答申では、コロナ禍以降の教育改革を推進するにあたり、国際的な動向を次のように明示している。

○国際的な動向を見ると、国際連合が平成27（2015）年に設定した持続可能な開発目標（SDGs）などを踏まえ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育むことが求められている。また、経済協力開発機構（OECD）では子供たちが2030年以降も活躍するために必要な資質・能力について検討を行い、令和元（2019）年5月に“Learning Compass 2030”を発表しているが、この中で子供たちがウェルビーイング（Well-being）を実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性

が指摘されている。

文部科学省（2021）pp.3-4（下線は筆者）

さらに、ウェルビーイングについては、脚注に次のような解説がある。今後の国際的な教育課題として、「幸福追求の学力保障」が明示されている。

OECDは「PISA2015年調査国際結果報告書」において、ウェルビーイング（Well-being）を「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き（functioning）と潜在能力（capabilities）である」と定義している。

文部科学省（2021）p4（下線は筆者）

2023年5月にG7教育大臣会合があった。文部科学省（2023a）G7教育大臣会合「富山・金沢宣言」では、ポストコロナの教育回復のため、すべての学習者に包摂的かつ公平で質の高い教育へのアクセスや学力保障が言及されている。

第一に、学校は多様な他者を尊重し、包摂的な社会を形成するための重要な基盤であり、コロナ禍によって明らかになった学校の本質的な役割を、維持・発展させていくことが極めて重要である。学校は、対面での教育や協働的な学びの機会を提供するとともに、子供が安心できて、受け入れられていると感じることのできる居場所・セーフティネットとしての役割を果たしている。これによって、学校は子供の心と身体の健康を支えることを含めて、ウェルビー

大阪総合保育大学

〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26

h-takebe@jonan.ac.jp

イングを高める役割を担っている。私たちは、学校のこの役割が今後も変わらず発揮されるよう全力を尽くしていく。

文部科学省（2023a）pp.1-2（下線は筆者）

学校は多様な他者を尊重し、包摂的な社会を形成するための基盤であることが再確認されている。そして、誰一人取り残さない共生社会の実現をめざし、子どもの心身の健康を支えながらウェルビーイングを高めていく学校教育の意味や役割が言及されている。

さて、これらのウェルビーイングを志向する小学校社会科の授業改善とはどういうことなのだろうか。これが本論文の問題設定である。

多用な教職員等のウェルビーイングの受けとめは「屋上屋を架す」といった感覚であろうか。「個別最適な学びと協働的な学び」や「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善」、「カリキュラム・マネジメント」等々の授業改善のキーワードに対して、消化不良や疲弊、カリキュラム・オーバーロード（教育内容等の過積載）のネガティブな感情が少なからず存在している。

そこで、本論文では、ウェルビーイングを志向する教育言説を整理し、教職員等がいつでも使える授業改善案を提案する。

まず、2023年度から始動している文部科学省や地方自治体の教育振興基本計画等にあるウェルビーイングを志向する教育言説から、社会生活の理解や参画を育む小学校社会科にとって重要なエージェンシーやエンパワメントの概念等を整理していく。

そして、小学校社会科地域学習「学校の近くのスーパーマーケットの仕事（第3学年）」を事例にウェルビーイングを志向する単元開発を提案する。2024年度から使用される教科書記述の分析を行い、子どもたちの幸福追求の学力保障の視点から単元デザインの方法を提案する。

Ⅱ 今、教職員等が必要とするウェルビーイング志向の教育言説

1 文部科学省（2023a）教育振興基本計画のウェルビーイング

文部科学省（2023a）は、予測困難な時代教育改革の羅針盤として、2つの「総括的な基本方針・コンセプト」を明示している。

- ① 2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成
- ② 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

である。

教職員等にとって気になるキーワードは、ウェルビーイングであろう。文部科学省（2023a）には、「ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。」¹⁾と解説されている。

しかし、多用な教職員等にとってはカリキュラム・オーバーロード加速化の感情が残ってしまう。そこで、文部科学省（2017a）小学校学習指導要領（平成29年告示）の前文を再確認してみたい。

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

文部科学省（2017a）p15（下線は筆者）

下線部の通り、教育振興基本計画の基本方針・コンセプトが明示されている。コロナ禍中にあっても推進してきた「個別最適な学びと協働的な学び」や「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善」等との親和性の高さを意識し、日々の授業研究を省察・改善することである。

2つの基本方針・コンセプトを実現するため5つの「基本的な方針」が明示されている。

- ① グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成
 - ② 誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進
 - ③ 地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進
 - ④ 教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進
 - ⑤ 計画の実効性確保のための基盤整備・対話
- である。

さらに、文部科学省（2023a）を読んでいくと、エージェンシーやエンパワメント等の解説も確認することができる。教職員等にとってはウェルビーイングを志向する授業改善のヒントになるキーワードである。

内田由紀子（2023）は、中央教育審議会のメンバーと

して学校向けにウェルビーイングを解説している。内田（2023）は、ウェルビーイングについて「持続的で共生的な幸せ」と簡明に定義する。

そして、「幸せが個人的で短期的なものを表しやすいことに比べると、より包括的で、社会や場所全体がよりよい状態を持続していくこと、そしてその場にいる人々が幸せを目指して生きることができるような場づくりにかかわる概念」²⁾と「場づくり」に注目する。

小学校社会科が、内田（2023）から学ぶべきことは、「場づくり」に注目した地域学習の改善である。学校がコミュニティの拠点となっている「場づくり」のよさへの注目である。コミュニティには、「自分と他者」、「つながり」、「協働性」、「利他性」、「多様性の尊重やサポート」等、ウェルビーイングを志向する教材開発のヒントが多数ある。

しかし、教職員等が留意しておかなければならないこともある。学校やコミュニティに見え隠れする同調圧力の問題である。内田（2023）は、「これからの共生社会に向けて、日本の学校が横並び的同調主義の押しつけられた協調性ではなく、幅広く多様な人々と自然に協力し、協同するような開かれた協調性を目指すような場所となるようにすれば、これは強みとしての国際社会にも発信できるようになります。」³⁾と提言している。ウェルビーイングを志向する場としての学校・コミュニティづくりの方向性を示唆している。

2 先行する教育委員会のウェルビーイング志向の教育振興基本計画

文部科学省（2023a）に先駆けて、ウェルビーイング教育を先行志向する教育委員会がある。次に示す熊本市・大阪府・長野県の各教育委員会は、文部科学省（2023a）から、「ウェルビーイング」「エージェンシー」「エンパワメント」「DX」等のキーワードを取り出し、各地の教育課題に対応できるようにしている。

（1）熊本市教育振興基本計画（令和2～5年度）〔熊本市教育大綱〕

遠藤洋路（2022）は、文部科学省出身の熊本市教育長の教育論である。早期からウェルビーイング志向やエージェンシー育成に着目し、熊本市教育振興基本計画（令和2～5年度）〔熊本市教育大綱〕をつくりあげている。

その基本理念は「豊かな人生とよりよい社会を創造するために、自ら考え主体的に行動できる人を育む」である。

市民が獲得すべきことを、
・個人と社会の幸せを追求する「ウェルビーイング（＝

よいあり方）」

・自らを「社会の担い手」と自覚し行動する「エージェンシー（よい方向に向かう能力や意志）」

ことを明確にしている。

戦後78年、継承発展してきた我が国の民主主義教育や主権者教育等の土台にし、さらに社会に参画する主体の育成のためのエージェンシーの教育論を展開している。

文部科学省（2023a）は、エージェンシーを、5つの基本的な方針の「①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」で取り上げている。「このことはOECDのラーニング・コンパスにおける生徒のエージェンシー（社会的な文脈の中で、変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力）の重視とも軌を一にする方向性である」⁴⁾と解説している。次代の資質・能力として注目されてきているところである。

（2）大阪府（2023）第2次大阪府教育振興基本計画

大阪府（2023）は3月に第2次大阪府教育振興基本計画を公表している。大阪の教育がはぐくむ人物像を「人生を自ら切り拓いていく人」「認め合い、尊重し協力していく人」「世界や地域とつながり社会に貢献していく人」と3つの人物像を明示している。

予測不能な時代を生きあうために、子どもたちが、自分のよさや可能性を見出すとともに、他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的課題に挑戦し、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会のつくり手を育てようとしている。

教職員等が受けとめたいことは、次の表記である。

「大阪に集う人たちがこれまででぐくんできた様々な良さを土台として継承し、『おもろいやん』と様々な物事に興味・関心、好奇心を持ち、チャレンジしていく姿勢、『ええやん』と互いを認め合い、評価することができる心、『まかしとき』と主体的に人や社会の役に立とうとする精神等、子どもたちが時代の変化を乗り越えるとともに、将来を生き抜く力を身につけられるよう、大阪の教育がはぐくむ人物像として、上記3つを掲げ、子どもたちの資質・能力を育成します。」⁵⁾

大阪の歴史や文化等の中で脈々と受け継がれてきた府民性等を踏まえたウェルビーイングな学びの方向性である。先述の文部科学省（2023a）のエージェンシーを、親しみやすい大阪弁で表現されている。「おもろいやん」「ええやん」「まかしとき」は、ウェルビーイングを志向する探究学習（生活科・社会科・総合的な学習の時間等）の単元デザインで使うことができる。

そして、次の2つの基本方針である。大阪の人権教育が大切にしてきたことを再確認しておきたい。

「一人ひとりの良さや可能性を引き出し、最大限伸ばす教育」

「子どもたちの多様性に応じ、誰一人取り残さない教育」である。

子どもたち一人ひとりが自分のアイデンティティを認識しつつ、様々な物事に好奇心を持ってチャレンジすることを後押しする教育の実現である。そして、他者を尊重し、協働しながら豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会のつくり手となることを後押しする教育の実現をめざしていることである。

大阪府（2023）は、文部科学省（2023a）の5つの基本的な方針の「②誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」を重視している。

大阪の人権教育が積み重ねてきたエンパワメント教育の視点である。「誰一人取り残されず、相互に多様性を認め、高め合い、他者のウェルビーイングを思いやることのできる教育環境を個々の状況に合わせて整備することで、つらい様子の子供が笑顔になり、その結果として自分の目標を持って学習等に取り組むことができる場面の一つでも多く作り出すことが求められる」⁶⁾を具現化しようとしてきた。さらに、子どもたちが持つ長所・強みを引き出して、可能性を発揮させていくエンパワメントの視点を見童理解や授業改善等に取り入れていくことを再確認しておきたい。

（3）長野県教育委員会（2023）第4次長野県教育振興基本計画

長野県教育委員会（2023）は3月に第4次長野県教育振興基本計画を公表している。タイトルは「個人と社会のウェルビーイングの実現」である。

長野県の歴史・文化等を踏まえて、今後の教育政策の4つの柱を明示している。

「一人ひとりが主体的に学び、他者と協働する学校をつくる」

「一人の子どもも取り残されない多様性を包み込む学びの環境をつくる」

「生涯にわたり誰もが学び合える地域の拠点をつくる」

「文化芸術・スポーツの身近な環境を整え、共感と交流が生まれる機会をつくる」

の4つの「つくる」である。

ウェルビーイングを志向する教育を県民に伝えるために、長野県教育委員会事務局教育政策課（2023）はコンセプトブックや動画を用意している。コンセプトブック

の表紙には、「一人ひとりの好きや楽しい、なぜをとことん追求できる探究県長野の学び」が強調されている。裏表紙には、「ウェルビーイング（Well-being）＝身体的・精神的・社会的に良い状態にあること」とイラストでわかりやすく表現されている。そして、「こんな時代だから、ワクワクしたい!」「これからの目指す姿・個人と社会のウェルビーイングの実現」いうタイトルで次の説明がはじまる。

「ますます変化が激しく予測が困難で唯一の正解がなくなっていくこれからの時代においては、一人ひとりが、他の誰でもない自分の個性や可能性を認識するとともに、多様な他者を尊重し、協働しながら持続可能な社会を創っていくことが求められています。そのことにより、多様な個人がそれぞれの幸せや生きがいを実感し、地域や社会も豊かで持続可能なものになっていく、『個人と社会のウェルビーイング』が実現していくと考えます。教育は、『今』を積み重ねた先にある『未来』を創造する営みであり、未来とは希望です。未来を担う子どもたちのみならずすべての人が、今、そして将来にわたって、学ぶことそのものに喜びを感じ、自分の学びや人生、そして社会変革の当事者になっていく、そのような学びの場を創ることが、個人と社会のウェルビーイングの実現につながります。すべての学びの場を、子どもも大人も共に学び、ウェルビーイングを追求し実現できる場にしていきたい、そのような想いから目指す姿を定めました。」⁷⁾

そして、個人と社会のウェルビーイングの実現のために「探究県」長野の学びを推進している。コンセプトブックの裏表紙に、「探究って何?」の説明がある。

「個人と社会のウェルビーイングを実現するためには、自ら課題や問いを見出し、その解決を目指して、仲間と協働しながら新たな価値を創造したり、一人ひとりが自分の“好き”なこと、“楽しい”こと、“なぜ”と思うことに没頭追求する『探究』が重要です。そのためには、人が生まれながらにして持っている『探究心』を学校においても社会に出てからも絶やさず伸ばし続けること、学校が探究する楽しさ、ワクワク感が実感できる場所であることが大切です。学びを、知識やスキルの習得に偏ったものか学びを、知識やスキルの習得に偏ったものから、探究し続ける中で、知識やスキルを獲得し、他者と協働しながら自分にしかない『知の体系』を構築していくものに転換していかなければならないと考えます。」⁸⁾

教職員等が長野県教育委員会（2023）から学ぶべきことは、「教育とは、未来を創造する営みであり、希望であること」、「学ぶことに喜びを感じ、よりよい社会を創

る当事者を育てていくこと」、「学校は探究する楽しさ、ワクワク感を実感できる場所」である。

「教育県」長野の伝統を継承し、子どもも大人もこれからの時代を自分らしく生き、共に学び、探究し、自分たちが望む未来の実現をめざしている。探究心の高揚でウェルビーイング志向の当事者を育てる「探究県」長野から学ぶべきことは多い。

Ⅲ ウェルビーイングを志向する小学校社会科の授業改善の視点

1 文部科学省（2023a）教育振興基本計画から小学校社会科の授業改善の視点を見出す

文部科学省（2023a）の5つの基本的な方針から日々の授業改善のヒントを見出すことができる。次の表1は、小学校社会科を実践する教職員等が必要とするキーフレーズ等をまとめたものである。

小学校社会科の授業改善を考えると、「主体的に社会

の形成に参画する態度の育成」「生徒のエージェンシー（社会的な文脈の中で、変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力）」、「誰一人取り残されない共生社会の実現」は、社会科教育の目標や学力論にかかわるキーフレーズである。

「地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現」「地域で人と人とのつながりを作り、協調的な幸福感を紡ごうと取り組んでいる人たちが自信と誇りに向けた教育の推進」「DXの推進」「情報活用能力の育成」「デジタルの活用とリアル（対面）活動・二項対立の関係には立たないこと」「NPO・企業等の多様な担い手との連携・協働」「自前主義からの脱却」「対話・支援体制の確保」等は、社会科教育の方法論やカリキュラム・マネジメントにかかわるキーフレーズである。

いずれも、小学校社会科の地域学習が大切になってきたことである。日々の「個別最適な学びと協働的な学び」や「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善につながるキーフレーズである。

表1 ウェルビーイングを志向する小学校社会科授業改善のキーフレーズ

5つの基本的な方針	小学校社会科を実践する教職員等が必要とするキーフレーズ等
①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○主体的に社会の形成に参画する態度の育成と価値創造の志向 ○OECDのラーニング・コンパスにおける生徒のエージェンシー（社会的な文脈の中で、変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力）の重視
②誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ○誰一人取り残されず、相互に多様性を認め、高め合い、他者のウェルビーイングを思いやることのできる教育環境の整備 ○子供たちが持っている「長所・強み」に着目し、可能性を引き出して発揮させていく視点（エンパワメント） ○誰もが違いを乗り越え共に生きる共生社会の実現 ○DE & I (Diversity Equity and Inclusion)「多様性」「公平、公正」「包摂性」の考え方の重視 ○「同調圧力（みんなで同じことを、同じように）」からの脱却 ○異なる立場や考え、価値観を持った人々同士が、お互いの組織や集団の境界を越えて混ざり合い、学び合うこと ○「風通しの良い」組織・集団 ○多様性を受け入れる寛容で成熟した存在となること
③地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ○「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の循環 ○地域コミュニティにおける個人と地域全体のウェルビーイングの向上 ○地域で人と人とのつながりをつくり、協調的な幸福感を紡ごうと取り組んでいる人たちの自信と誇り
④教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進	<ul style="list-style-type: none"> ○情報活用能力の育成 ○教師の指導力向上・ICT環境整備の更なる充実 ○誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す教育としての遠隔・オンライン教育やデジタル機器の機能を最大限に活用 ○デジタルの活用とリアル（対面）活動 ○「二項対立」の関係には立たないこと
⑤計画の実効性確保のための基盤整備・対話	<ul style="list-style-type: none"> ○NPO・企業等の多様な担い手との連携・協働 ○「自前主義からの脱却」、対話・支援体制の確保

（筆者作成）

文部科学省（2017a）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）の社会科の目標には次のように記されている。教職員等は、2020 年代の教育改革の趨勢としてウェルビーイング・エージェンシー・エンパワメント等を意識した授業改善の方向性を見出す必要がある。

第2 節 社会 第1 目標

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことと選択・判断したことを適切に表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

文部科学省（2017）p46（下線は筆者）

下線部からも明らかなように、社会科はウェルビーイングを志向する教科である。社会生活の理解とシティズンシップ（社会参画）、資質・能力としてエージェンシーを育む教科である。そして、社会的な見方・考え方を働かせて問題発見・解決力を獲得させる共生社会実現のためのエンパワメント教科である。

2 「エージェンシー」にかかわる先行研究

白井俊（2020）は、教職員等向けの OECD Education 2030 の解説書である。白井（2020）は、教育基本法第 2 条の「公共の精神に基づき、主体的な社会の形成に参画し」にエージェンシーを見出している。「すなわち、エージェンシーは、主体的に社会に参画していくことを意味するが、それは単に自分が希望するからということではなく、それぞれが属する社会における自らの役割や責

任を認識したうえで、一人一人が主体的に行動していくことが含意されているからである。」⁹⁾と述べている。社会科教育は、日本国憲法や教育基本法等の諸理念を実現するための教科教育のひとつである。社会科教育で大切にしている平和で民主的な国家・社会の形成者の育成は、社会参画教育であり、ウェルビーイングを志向するエージェンシー教育である。

藤井聡（2020）は、アメリカのシティズンシップ教育の研究論文である。社会科教育の基盤となるシティズンシップ教育における市民としての行為主体性（civic agency）のアポリア（難題）に迫っている。アメリカの政治思想家であるハリー・ポイトが提起するシティズンシップ教育の目標概念について次のように整理している。「ポイトの市民的行為主体性は、生活の中に小さな政治秩序を立ち上げる過程を経験した者の内に、身近な集団、組織においても同様の公共的な秩序や空間を再生産できるという感覚を萌芽させようとするにある。」¹⁰⁾

教職員等がとらえておくべきことは、エージェンシーを「行為主体性」と訳していることである。ポイトの市民的行為主体性（civic agency）は、民主主義の理解を深め、社会に参画するシティズンシップ教育の基軸である。主権者教育の基礎・基本として省察・理解すべき概念である。

香川奈緒美（2023）は、「ユネスコ・教育を再考する」の翻訳・解説書である。「エージェンシーの概念は、組織力の最大化を個々の多様性を押し殺して得る同質化ではなく、多様性を尊重することで追求する。つまり、社会や組織に参画するすべての主体である個々がそれぞれにエージェンシーを発揮し、様々な価値や課題を批判的に主体として検討して判断することで、結果的に社会や組織として至善の方向性を示すとともに、最大の力が発揮されるという近代市民社会の社会と個人のあり方の思想がエージェンシーの基盤にある。」¹¹⁾と述べている。また、シティズンシップについては「市民権」としてとらえている。「シティズン（市民：Citizen）は単なる社会の構成員ではなく、社会のありようを直接的にも間接的にも判断する主体として社会に参画する。任意の社会に主体として参画する構成員はシティズンシップ（市民権）を有しており、その社会で優先的な地位をもつ。」¹²⁾と述べている。

白井（2020）、藤井（2020）、香川（2023）の諸論説からも明らかなように、社会科教育が目指すシティズンシップの育成と教育振興基本計画等に登場しているエージェンシーの育成については親和性が高い。社会科教育やシティズンシップ教育にとってエージェンシーは新し

い概念ではない。

3 「誰一人取り残さない共生社会の実現とエンパワメント」にかかわる先行研究

高田一宏（2019）は、人権教育・学力保障を土台にした「ウェルビーイングのための学校」を検討している。子どもの権利保障の視点から、人権教育とソーシャルワークの共通する発想や方法を次の3点に整理している。(1)当事者の直面する問題を周囲の人々との社会関係や社会的な背景のもとで捉えること（エコロジカルな視点）。(2)社会的「弱者」と見なされがちな当事者の「強み」に光をあてること（エンパワメントの視点）。(3)当事者支援の活動と権利実現・権利擁護の社会運動とつながること（アドボガシーの視点）である。

そして、「困難を抱えた子どもが多ければ多いほど、困難が複合的であればあるほど、要素還元的な発想で学力向上の「対策」を講じても教育成果はあがらない。ウェルビーイングの実現という理念にたって子どもの生活環境をホリスティックに捉え、ウェルビーイングを実現する要素のひとつに学力保障を位置づけ、ソーシャルワークを学校教育活動と結びつけていくことで、メリトクラシーを乗り越える学力保障の展望を切り拓くことができる。これが本書全体の結論である。」¹³⁾と断言している。

安梅勅江（2019）は、持続可能に社会の実現に向けて我々一人一人がエンパワメントを必要としていることを明示した解説書である。エンパワメントとは、「人々に夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生き方を湧き出させることです。」¹⁴⁾と定義し、Empowermentを「湧活」と和訳している。

安梅勅江（2021）は、エンパワメントの8原則「①目標を当事者が選択する」「②主導権と決定権を当事者が持つ」「③問題点と解決策を当事者自身が考える」「④新たな学びと、より力をつける機会として当事者が失敗や成功を分析する」「⑤行動変容のために内的な強化因子を当事者とサポーターの両方で発見し、それを増強する」「⑥問題解決の過程に当事者の参加を促し、個人の責任を高める」「⑦問題解決の過程を支えるネットワークと資源を充実させる」「⑧当事者のよりよい状態（目標達成やウェルビーイング）に対する意欲を高める」を提案している。

教職員等が学ぶべきことは「湧活」というポジティブなとらえ方である。配慮を要する子どもの指導において、ケアやサポートを重視しているがエンパワメントにまでつながっていないというのが教育現場の困難ではないだろうか。誰一人取り残さない共生社会の実現を学校

生活に見出すには「湧活」を意識することではないだろうか。

これらの先行研究から教職員等が学び行動化すべきことは、ウェルビーイングを志向する教育の根底には「誰一人取り残さない共生社会の実現」と「エンパワメント」があることを再確認し、日々の授業改善で実現させていくことである。共生社会の実現は、社会科がねらいとする社会生活の理解と社会参画とかかわる課題である。子どもの視点から社会参画ということ考えると学級・学校社会への参画ということになる。学級・学校社会にストレスを感じる子どもが増加している。今でも存在する同調圧力、排除等の解消を目指すエンパワメントの授業改善が必要である。高田（2019）の3つの視点や、安梅（2019）の「湧活」は社会科の授業改善の大きなヒントである。

IV ウェルビーイングを志向する教職科目「社会科指導法」の改善

本章では、ウェルビーイング志向のエージェンシーやエンパワメントを育成する社会科実践について考察する。ウェルビーイングを志向する小学校社会科の授業改善のために、教職員等が獲得すべきスキルやマインドがある。第3学年「学校の近くのスーパーマーケットの仕事」の単元デザインを例にして、教職科目「社会科指導法」の改善について検討する。

1 教科書の分析からはじめる

(1) 教科書の強みから学ぶこと

小学校では2024年度から全教科等で教科書改訂が予定されている。社会科教科書については3社が検定済となり、一般公開されている。

これらの教科書を社会科入門学年の第3学年を中心に概観する。事象や人々の相互関係について見方・考え方を働かせる「地域の販売の仕事」の単元デザインについて3社の教科書について私見を述べる。

第3学年「地域にみられる販売の仕事」の主教材は3社ともスーパーマーケットである。社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する学習活動例が明示されている。

次の表2は、本時の問いの連続や学習問題、単元全体の学習活動の流れや獲得されるべき概念に関する知識を整理したものである。

3社ともに、子どもの問題解決学習を重視し体験学習を取り入れている。消費者の立場からのアプローチ、学習問題の設定、見学やインタビュー、まとめという問題

解決学習が例示されている。また、各ページに子ども自身が見方・考え方を働かせるポイントが明示されている。教職員等にとっては、教科書誌面上の子どもの発言やキャラクターのつぶやき等が授業改善のヒントになる。

社会科学習入門期の第3学年の子どもたちがスーパーマーケットの仕事について学ぶことになる。事象や人々の相互関係について見方・考え方を働かせる「地域の販売の仕事」の単元である。見学やインタビューを通して、事象や人々の相互関係に踏み込むということになる。第3学年の子どもたちにとってはやや困難な単元学習となる。

3社の新教科書から学ぶべきことは、見方・考え方を働かせている子どもの学習活動例である。「お店のくふう」と「お客さんの願い」を関連図等で整理することで、比較・関連・意味追究の思考方法を例示している。

地域学習だからこれらの教科書をそのまま教えるのではない。教科書から学びながら自校の近くのスーパーマーケットの強みを活かす教材開発が必要となる。授業

者としてのセンスやスキル、マインドが問われることになる。

(2) 教科書の使用で留意すること

3社の教科書の強みを把握したうえで、文部科学省(2017a)(2017b)を再読し、確認しておきたいことがある。これから、自校の近くのスーパーマーケットの教材開発・単元デザインをはじめることになるが、教科書活用上の留意点も知っておく必要がある。

文部科学省(2017a)小学校学習指導要領(平成29年告示)に社会科の「指導計画の作成と内容の取扱い」がある。

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、問題解決への見通しをもつこと、

表2 2024年度から使用される教科書の単元デザイン

305 東書 新編 新しい社会 3 pp.66-83	307 教出 小学社会 3 pp.48-65	308 日文 小学社会 3年 pp.74-93
<p>2 店ではたらく人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしたちは、どのようなところで買い物をしているのでしょうか ・家の人はどのような店でよく買い物をしているのでしょうか <p>◎学習問題 スーパーマーケットではたらく人は、たくさんのお客さんに来ってもらうために、どのようなくふうをしているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットの売り場は、どのようなになっているのでしょうか ・たくさんの品物は、どこから運ばれてくるのでしょうか ・スーパーマーケットでは品物のならべ方や売り方をどのようにくふうしているのでしょうか ・スーパーマーケットでは、そのほかにどのようなくふうをしているのでしょうか <p>子どもの発言から「それが、お店の<u>売り上げ</u>にもつながっていることがわかったよ。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べたことをもとに、スーパーマーケットではたらく人のくふうについてまとめましょう 	<p>1 店ではたらく人と仕事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家の人たちは、どのような店で買い物をしているのだろうか ・家の人たちは、どこでかいものを買うことが多いのだろうか ・店でお金をはらうしくみは、どのようなになっているのだろうか <p>◎学習問題 店ではたらく人たちは、お客さんによるこんで買ってもらえるように、どのようにくふうをして<u>売り上げ</u>を高めているのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットのくふうを調べには、どうすればよいだろう ・店ではたらいっている人たちは、どのようなことに気を付けているのだろうか ・店で売られている商品は、どこから運ばれてくるのだろうか ・お客さんは、どんなことに気を付けて買い物をし、店は、どのようにくふうしているのだろうか 	<p>2 店ではたらく人びとの仕事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしたちの住む地いきには、どのような店があるだろう ・家の人がよく買い物をするのは、どのような店なのだろう <p>◎学習問題 スーパーマーケットに、たくさんのお客さんが買い物に来ているのは、なぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットには、どのようなくふうがあるのだろうか ・スーパーマーケットの売り場は、どのようなようすなのだろう ・はたらく人はどのようなことに気を付けているのだろうか ・品物を売る以外にどのようなくふうがあるのだろうか ・いろいろな品物をそろえるためにどのようなくふうがあるのだろうか ・たくさんのお客さんが買い物に来るわけは何だろう <p>未来につながるわたしたちのSDGs 食べられずにすてられてしまう食品をへらすために</p>

(筆者作成)¹⁵⁾

社会的事象の見方・考え方を働かせ、事象の特色や意味などを考え概念などに関する知識を獲得すること、学習の過程や成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追究・解決する活動の充実を図ること。

文部科学省（2017a）p62（下線は筆者）

下線部は小学校社会科の問題解決学習の単元デザインの基本である。3社の教科書ともに、この流れで構成されている。しかし、表2の太字と下線で示した「売り上げ」のような「概念などに関する知識」の記述は多様である。

文部科学省（2017a）から、本単元で獲得させる「概念などに関する知識」を再確認する。

(2) 地域に見られる生産や販売の仕事について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(イ) 販売の仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、工夫して行われていることを理解すること。

文部科学省（2017a）p47（下線は筆者）

内容(2)-ア-（イ）にあるように「販売の仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、工夫して行われていること」が本単元の学習で子どもたちが獲得する概念などに関する知識である。

しかし、3社の教科書記述を比較してみると、「売り上げ」というキーワードの取り上げ方が多様である。単元のはじめの学習問題で出てくる教科書や、記述されていない教科書もある。

宗實直樹（2023）は、店ではたらく人びとの仕事の教材研究のポイントとして、「売り上げ」という経済用語の使用に着目することを明示している。「働く人の『工夫』や『努力』の視点だけでなく、『利益』等の経済的視点を持ち、3年生の時からお金や金融に対する関心や基礎的な知識を身に付けられるようにします。」¹⁶⁾と述べている。

教職員等にとっては、経済用語としての「売り上げ」を教え込むことかといった疑問が生じてくる。文部科学省（2017b）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編を再読する必要がある。

これらの主体的・対話的な学びを深い学びにつなげるよう指導計画を工夫、改善することが求められ

る。そのためには、児童の実態や教材の特性を考慮して学習過程を工夫し、児童が社会的事象の見方・考え方を働かせ、主として用語・語句などを含めた具体的な事実に関する知識を習得することにとどまらず、それらを踏まえて社会的事象の特色や意味など社会の中で使うことのできる応用性や汎用性のある概念などに関する知識を獲得するよう、問題解決的な学習を展開することが大切である。また、学んだことを生活や社会に向けて活用する場面では、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断することなどの活動を重視することも大切である。

文部科学省（2017b）p136（下線は筆者）

つまり、「売り上げ」は単なる経済用語や語句レベルの知識ではないということである。「販売の仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、工夫して行われていること」というのは、応用性・汎用性のある概念などに関する知識である。中学校社会科の公民や高校の公共の教科書、大学の経済学のテキストに登場する「企業の目的は利潤を追求」の理解につながる知識である。そして、生まれた時から消費者や納税者、社会に出て生産者等になる経済活動の主人公が獲得しておくべき生きて働く知識なのである。

2 校区周辺のスーパーマーケットをフィールドマイニングする

地域学習にかかわる教職員等は、フィールドマイニングを楽しむことである。松村真宏（2012）は、「普段から目にしているモノや耳にしているオトでも、日常の生活にとけ込んでいると意識することはほとんどない。しかし、そのようなモノやオトに意識が向くようなきっかけがあれば、固定的な見方しかできなかった対象への新たな見方に気づき、それがフィールドの魅力となる。いったんフィールドの魅力に気づけば、その場所が特別な意味を持つようになり、親しみや愛着が芽生えてくる。そのような背景から、筆者は日常の生活の中に遍在する魅力に気づかせる仕掛けによって日々の生活の質を豊かにする試みとしてフィールドマイニングを提唱しさまざまな取り組みを進めている。フィールドマイニングは『人とモノと環境との関係を再構築するための方法論』であると定義しており、具体的には『ちょっとした仕掛け』によって人の意識や行動を変化させ、それによってフィールドの魅力に気づかせるアプローチをとっている。」¹⁷⁾と述べている。

教職員等には、出退勤時に校区周辺のスーパーマー

ケットに立ち寄り、フィールドマイニングを楽しんでもらいたい。フィールドマイニングによる教材研究で、消費者の願いとスーパーマーケットの販売戦略のせめぎあいに見出すことができるからである。江戸時代からの近江商人の教えである「売り手よし、買い手よし、世間よし」をスーパーマーケットの仕事に見出すことである。

スーパーマーケットは、消費者のインセンティブ（誘因）になるようにいろいろな仕掛けをしている。子どもたちは、スーパーマーケットの仕掛けを探究することで、社会的な見方・考え方を働かせることができる。さらに、スーパーマーケットの販売戦略の意味を追究することが消費者としてのエンパワメントにつながるのである。

3 指導案を書いてみる

さて、いよいよ指導計画の作成である。目標・評価標準の作成、指導計画等で単元をデザインしていく。ウェルビーイング志向やエージェンシーの育成、誰一人取り残さないエンパワメントの指導を意識して自分の指導計画を書くことである。

以下は、筆者の実践事例に基づく単元デザイン案である。

(1)単元名

「学校の近くのスーパーマーケットの仕事」

(2)単元の目標

学校の近くのスーパーマーケットの仕事について、消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどに着目し、それらの仕事に見られる工夫の意味を考え、表現することを通して、販売の仕事は消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう工夫して行われていることを理解できるようにする。

(3)評価標準

次の表3は本単元の評価標準である。子どもの学習活動を想定した目標分析である。子どもたちが出会うスーパーマーケットの販売戦略にウェルビーイング志向を見出すことを試みた。

(4)単元デザイン

表4は「学校の近くのスーパーマーケット」の指導計画案である。大阪府（2023）をヒントに、問題解決学習の単元デザインを試みた。「おもろいやん（問題発見）」「ええやん（見方・考え方を働かせる）」「まかしとき（概念などに関する知識の獲得）」で指導計画を立案してみた。

大阪府（2023）に学び、問題解決学習のプロセスを「おもろいやん（問題発見）」「ええやん（見方・考え方を働かせる）」「まかしとき（概念などに関する知識の獲得）」でデザインしてみた。

小学校社会科では、「なぜだろう?」「どのようなになっているのかな?」等の学習問題が多い。しかし、学習対象に「おもしろい?」がなければ問題意識は出てこない。「いつもにぎわっているね」「楽しそうだね」「おもしろそうだね」等があつて、「見学に行つて調べてみたい」という学習意欲が高まるのである。

次に学ぶべきことは「ええやん（見方・考え方を働かせる）」「まかしとき（概念などに関する知識の獲得）」である。見方・考え方を働かせ探究する学習過程で、「ええやん」を意識させることである。消費者の便利や買いやすい、安心できる等の「ええやん」にこたえることがスーパーマーケットの販売戦略である。「ええやん」の背景にあるスーパーマーケットの仕事の意味を追究することが社会的現象の見方・考え方を働かせることである。

そして、消費者も販売者も共にあるウェルビーイング志向に気付くことになる。「まかしとき、賢い消費者に

表3 「学校の近くのスーパーマーケット」の評価標準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットの仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう工夫して行われていることを理解している。 ・バックヤードの見学や店長さんへのインタビューをしたり、商品のふるさとを地図帳で調べたりして、ノートやイラスト、白地図や思考ツールの利活用等でまとめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者の願い（商品の安全性や価格の安定等）、販売の仕方（集客や利潤追求等）、他地域や外国との関わり（流通や貿易等）に着目して、販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え、表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットの仕事には、ウェルビーイング志向（フードロスやリサイクル、ユニバーサルデザイン等）の対応が見られることから、自分も地域の消費者としてできることを考え、行動しようとしている。 ・江戸時代の近江商人の教え、「売り手よし、買い手よし、世間よし」から、ウェルビーイングを志向する消費者の行動を探究し続けている。

（筆者作成）

表4 「学校の近くのスーパーマーケット」の指導計画案

問題発見・解決学習の過程	◎小単元名（時数） ○子どもから引き出したい言動等
<p>「おもしろい（問題発見）」</p> <p>・ 地元の消費者としてスーパーマーケットの販売の仕事に疑問をもち、調べてみたいという学習意欲を高めていく。</p>	<p>◎いつもにぎわうスーパーマーケット（1時間）</p> <p>○「いつでもにぎわっている」「朝から深夜まで営業しているらしい」「駐輪場が使いやすい」「買いやすい」「便利だ」「何でもそろっている」等</p> <p>○学習問題を設定する</p> <p>学校の近くのスーパーマーケットは、どうしていつもにぎわっているのだろう？</p> <p>○見学の見通しをもつ</p> <p>「店長さんにインタビューしてみたい」「バックヤードに行ってみたい」等</p>
<p>「ええやん（見方・考え方を働かせる）」</p> <p>・ 消費者の立場でスーパーマーケットの販売の仕方やサービスの「ええやん」を探してくる。</p> <p>・ スーパーマーケットのサービス等の意味を考える。</p>	<p>◎スーパーマーケットを見学しよう（2時間）</p> <p>「広くて、明るくて、涼しくて気持ちいいね」「入口のフルーツがおいしそうだよ」「外国産の野菜や果物があるよ」「農家さんのことがわかるポップがあるよ」「デリカテッセン売り場がいちばんにぎわっているね」「パン売り場からいい匂いがしてくるよ」「バックヤードにたくさんの人が働いているよ」「店長さんにバックヤードに連れて行ってもらったよ」「冷蔵トラックからたくさんのジュースや牛乳を大きなカートで運んでいるよ」等</p> <p>◎商品のふるさと調べ（1時間）</p> <p>○「バナナはフィリピン産ってシールにかいているよ」「りんごは青森県や長野県から届いているんだね」「どこから来るのか地図帳で調べてみよう」「スーパーマーケットのいろいろな商品のふるさと地図をつくろう」</p> <p>◎スーパーマーケットで働く人（1時間）</p> <p>○「いろいろなユニフォームの人が仕事をしていたよ」「トラックから商品を運ぶ人」「バックヤードで調理している人のユニフォームは学校の給食調理員さんに似ていたね」「レジやサービスカウンターの人のユニフォームはかっこいいね」「店長さんの話では正社員が6人、パートさんが約100人働いているということだったね」「早朝勤務の人、深夜勤務の人など時間交代で働いているんだね」等</p> <p>◎デリカテッセンで働く人（1時間）</p> <p>○「おいしそうなお弁当・おにぎり・寿司・サラダ・煮物・揚げ物などがいっぱい並んでいたね」「サラダはポテト・マカロニ・ハム・シーフード・シーザー等々10種類以上あったよ」「コロッケもミート・カレー・コーンクリーム等々5種以上あったよ」「コロッケなどは2個入りと3個入りのパックがあるよ」「みんな少量パックに入っているね」「あんなにたくさんのパックがきれいに並んでいるね」「デリカテッセンの冷蔵庫の上の壁はガラス張りになっているよ」「学校の給食室に似ているね、少し小さいけど」等</p>
<p>「まかしとき（概念に関する知識の獲得）」</p> <p>・ 消費者の多様な願いと販売の工夫を関連図にまとめる。</p> <p>・ スーパーマーケットの仕事は、売り上げを高めるよう工夫して行われていることを説明できる。</p>	<p>◎お客さんの願いにこたえる仕事（2時間）</p> <p>○「どうして、わざわざこんな売り方をしているんだろう」「店長さんは地域の人に安心してもらうサービスを考えているって言っていたよ」「安心してもらうとたくさんのお客さんに来てもらえるよね」「たくさんのお客さんに来てもらうと何がうれしいのかな」「たくさんのお客さんに来てもらうとたくさん売れるんだよ」「たくさん売れるとスーパーマーケットが儲かるんだよ」「いろいろな売り場の工夫を関係図に整理していこう」等</p> <p>◎ウェルビーイングな消費者になるために（1時間）</p> <p>○「各売り場にたくさんの「ええやん」があるね」「学習問題を振り返り、スーパーマーケットの学習をまとめてみよう」等</p> <p>概念などに関する知識 スーパーマーケットがいつもにぎわっているのは、お客さんに安心・信用してもらい、たくさんの集客と販売で売り上げを高める仕事をしているからである！</p> <p>○「一人暮らしの人のための少量パックや夜12時までの営業は、たくさんのお客さんに来てもらい、売り上げを高める工夫だったんだね」「店長さんは地域のことを考えていろいろなサービスを考えているんだね」「フードロスを減らすための安売りは大切なことだよ」等</p>

（筆者作成）

なったるねん」という「生きて働く知識」を獲得することになる。

V 成果と課題

これまで、教育振興基本計画にあるウェルビーイング志向の諸言説から、小学校社会科の授業改善の方向性を検討してきた。明らかになったことは次の2点である。

- ・小学校社会科の目標論において、ウェルビーイング志向とシティズンシップ（平和で民主的な社会の形成に参画する資質・能力等）の育成とは親和性が高い。
- ・ウェルビーイング志向の教育に必要なエージェンシーとエンパワメントの育成は、社会的な見方・考え方を働かせて生きて働く知識を獲得する小学校社会科の問題解決学習そのものである。

そして、ウェルビーイングを志向する小学校社会科の単元デザインを提案した。2024年度に使用される教科書記述から授業で活用すべき点と留意すべき点を分析した。

利活用すべき点は、社会科の見方・考え方を働かせることを促す記述である。例えば、スーパーマーケットを見学する際の視点づくりや、働く人々から得た情報のまとめ方、消費者としての行動などは、主体性と振り返り、責任ある行動力のエージェンシーの育成である。

留意すべき点は、概念に関する知識（生きて働く知識）の記述が多様であるということである。例えば、売り上げに関する記述である。本単元のゴールとして獲得されるべき概念に関する知識であるが、学習問題の設定場面、つまりスタートから記述されていたり、全体として記述されていなかったり、ゴールの記述が曖昧である。

そこで、ウェルビーイング志向の小学校社会科の単元開発を試みた。学習材であるスーパーマーケットの仕事にウェルビーイングを見出すことにした。消費者の願いにこたえるサービスを工夫することで地域住民の信頼を獲得し、売り上げを高めていく仕事であることを理解させるようにした。消費者の願いとスーパーマーケットの販売戦略がせめぎあうことで、よりよい消費生活につながるというウェルビーイング志向である。

2023年度前期の「社会」15講の課題演習の時であった。小学3年の「スーパーマーケットの販売の工夫」についての教材開発と単元デザインを課題とした。教育振興基本計画の2つのコンセプトが「持続可能な社会の創りの育成」「ウェルビーイングの向上」であることから、スーパーマーケットの販売戦略にこれらを見出し、教員志願学生らしい自分なりの教材開発が演習課題である。

2年生の学生から発言やつぶやき等に次のような提案があった。

「店内に流れている音楽にウェルビーイングがありそうな気がします。」

スーパーマーケットでアルバイトをしている学生からの発言である。

参加学生で、オール日本スーパーマーケット協会(2015)の検索から始まった。1時間ごとに店内に流れる音楽を聴くことができた。

「何となく落ち着く曲やね」

「くらし良好というフレーズが耳に残ります」

検索した歌詞や音楽の視聴の後、意見交換が始まった。

「この音楽、うちの近くのスーパーマーケットでも流れているよ」

「なんとなくほのぼのする曲だよね」

「何か安心感があるよね」

「いつもアルバイトしながら聞こえていた曲だけど、歌詞までは知らなかった」

「くらし良好って、ウェルビーイングじゃないの」

「歌詞の中に、お客様へのサービスや集客のねらいが書いてありますよ」

「この曲をスーパーマーケットの学習の単元末の授業で流し、意味を考えさせるようにしたら、理解が深まるんじゃないかな」

これらの学生たちの発言やつぶやき等から学ぶべきことは、日常のフィールドマイニングを通して、単元デザインのセンスやマインド、そしてスキルが少しずつ育ちつつあるということである。

教材研究や開発でウェルビーイング志向を見出し、子どもたちにエージェンシーを育成していくことやエンパワメントしていくことが、社会科の授業改善の方向性であると考えている。今後も、教員志願学生のセンス等に学びながら教職科目「社会科指導法」の省察と改善を展開していきたい。

注

- 1) 文部科学省 (2023a) pp.8-9
- 2) 内田由紀子 (2023) p.30
- 3) 内田由紀子 (2023) p.31
- 4) 文部科学省 (2023a) p.11
- 5) 大阪府 (2023) p.25
- 6) 文部科学省 (2023a) p.16
- 7) 長野県教育委員会事務局教育政策課 (2023) pp.5-6
- 8) 長野県教育委員会事務局教育政策課 (2023) p.8
- 9) 白井俊 (2020) p.85 は OECD のラーニング・コンパスを踏まえたものである。エージェンシーの他にもエビスマ

ティックな知識と「見方・考え方」との関連を解説している。現行の学習指導要領にある見方・考え方を深く理解することができる。

- 10) 藤枝聡 (2020) p195 はアメリカのシティズンシップ教育のひとつであるハリー・ボイトの考え方に基づくものである。市民としての問題解決学習、パブリック・アチーブメントの学習プロセス等は社会科や総合的な学習の時間の探究学習で活用できる。
- 11) 香川奈緒美 (2023) p95 はエージェンシーの発揮を民主社会の「至善」という方向性でとらえている。
- 12) 香川奈緒美 (2023) p97 はシティズンシップを「市民権」としてとらえている。社会に参画するための資質・能力ではなく、ウェルビーイングを享受する権利としての理解である。
- 13) 高田一宏 (2019) p201 は人権教育を基盤とした学力保障の考え方である。弱者と見なされがちな当事者の強みに光をあてるエンパワメントの考え方は、子ども理解を基盤とする授業改善の重要なキーワードとなる。誰一人取り残さない教育の考え方の根底にあるものである。
- 14) 安梅勅江 (2019) p6 の「湧活」の考え方は、ウェルビーイングを志向する授業改善のヒントになる。子ども理解を基盤とする授業改善や指導と評価の一定化の土台となるものである。
- 15) 2024 年度新教科書採択の公開期間中に、文部科学省 (2023b) や、澤井陽介ほか 102 名 (2023) pp.66-83・大石学 小林宏己ほか 73 名 (2023) pp.48-65・池野範男 的場正美 安野功ほか 178 名 (2023) pp.74-93 を概観し、筆者が作成したものである。
- 16) 宗實直樹 (2023) p58 は教科書会社等が躊躇する概念などに関する知識の必要性を明らかにしている。
- 17) 松村真宏 (2012) p47 は地域教材開発の基礎・基本である。

文献

- 安梅勅江 (2019) 子どもの未来をひらくエンパワメント科学 日本評論社
- 安梅勅江 (2021) エンパワメントの理論と技術に基づく共創型アクションリサーチー持続可能な社会の実現に向けてー北大路書房
- 遠藤洋路 (2022) みんなの「今」を幸せにする学校ー不確かな時代に確かに学びの場をつくるー時事通信社 pp.32-40
- 藤枝聡 (2020) シティズンシップ教育における「市民としての行為主体性」概念の再検討ーハリー・ボイトとガート・ビースタの議論を手がかりにー東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室 研究室紀要 第46号 2020年7月 pp.187-196
- 池野範男 的場正美 安野功ほか 178 名 小学社会3年 日本文芸出版
- 香川奈緒美 (2023) エージェンシーとシティズンシップ 日本教師教育学会第10期国際研究交流部 百合田真樹人 矢野博之 編 ユネスコ・教育を再考するーグローバル時代の参照軸ー 学文社
- 松村真宏 (2012) 見方を学ぶフィールドマイニングゲーム

KEIO SFC JOURNAL 12 (2), pp.47-59

文部科学省 (2017a) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)

文部科学省 (2017b) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説社会編

文部科学省 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指してー全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現ー (答申)

文部科学省 (2023a) G7 富山・金沢教育大臣会合「富山・金沢宣言」(仮訳)

https://www.mext.go.jp/content/20230515-mxt_kouhou02-000026703_3.pdf (2023.8.28 アクセス)

文部科学省 (2023b) 教育振興基本計画 (令和 5 年 6 月 16 日閣議決定)

https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_soseisk02-100000597_01.pdf (2023.8.28 アクセス)

文部科学省 (2023c) 小学校用教科書目録 (令和 6 年度使用)

https://www.mext.go.jp/content/20230515-mxt_kouhou02-000026703_3.pdf (2023.8.28 アクセス)

宗實直樹 (2023) 「視点」をもってお店見学に臨もう 教材研究×社会 実践でゼロからわかる超実践ガイド 小学校・中学校「社会科教育」編集部編 明治図書

長野県教育委員会 (2023a) 第4次教育振興基本計画 令和5年3月

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku02/gyose/zenpan/keikaku/documents/kyoikukeikaku.pdf> (2023.8.28 アクセス)

長野県教育委員会 (2023b) 第4次教育振興基本計画コンセプトブック

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku02/gyose/zenpan/keikaku/documents/conceptbook.pdf> (2023.8.28 アクセス)

大石学 小林宏己ほか 73 名 (2023) 小学社会3 教育出版

オール日本スーパーマーケット協会 (2015) AJS News Release 2015年6月15日

http://www.ajs.gr.jp/upimages/pdf/375_1.pdf (2023.8.28 アクセス)

大阪府 (2023) 第2次大阪府教育振興基本計画 令和5 (2023) 年3月

<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/16852/00000000/kihonkeikaku.pdf> (2023.8.28 アクセス)

澤井陽介ほか 102 名 (2023) 新編 新しい社会3 東京書籍

白井俊 (2020) OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー、資質・能力とカリキュラムー ミネルヴァ書房

高田一宏 (2019) ウェルビーイングを実現する学力保障ー教育と福祉の橋渡しを考えるー 大阪大学出版会

内田由紀子 (2023) ウェルビーイングと教育 教職研修 2023.1月号 pp.30-31 教育開発研究所

付記

本論文に関して開示すべき利益相反事項はない。

Improvement of the Teaching Profession Subject “Social Studies Teaching Methods” : From the Unit Design of Community Learning for Well-Being

Hirokazu Takebe
Osaka University of Comprehensive Children Education

This paper is written based on the concepts of the Basic Plan for Education Promotion (approved by the Cabinet in June 2023), “fostering the creators of a sustainable society” and “improving well-being,” as an opportunity to reflect on and improve elementary social studies.

First, I organize well-being discourses necessary for improving classes in elementary school social studies.

Next, I analyze the elementary school social studies textbooks that will be used from 2024.

Then, I will clarify practical issues and propose the main points of unit development aimed at well-being.

Key words : teacher education, well-being agency, empowerment, unit design